

【植物ニュース】 no.203-218.

長野県植物研究会誌第 56 号に引き続き、「植物ニュース」をお届けします。今回は 203 から 218 の記事を掲載します。

「植物ニュース」には新産地報告や観察記録など簡単な記事を載せたいので、掲載された記事を参考にして執筆し、とりまとめ役の大塚あて(kootsu51@yahoo.co.jp) に記事をお寄せください。

(大塚孝一)

203. ハゴロモコタニワタリ (チャセンシダ科)

Asplenium incisum × *A. scolopendrium* (*Asplenium* × *ikekawae* Nakaike, nom.nud.)

ハゴロモコタニワタリはコタニワタリ *Asplenium scolopendrium* とトラノオシダ *A. incisum* との自然雑種と推定されるシダで、葉はコタニワタリの葉の辺縁が切れ込んだような形をしていて、胞子は不定形となる。最初、山口県で採集され、長野県では 2006 年に岡武利により安曇野市で、2020 年に上野勝典・上野由貴枝により辰野町で採集されている(大塚 2013、上野・上野 2022)。

本シダを、茅野市蓼科湖畔で 2022 年 7 月に採集した。生育地は標高約 1,100m のカラマツ林内の石垣で、多数のコタニワタリが生える中に 2 株あり、葉長約 20cm と約 10cm の個体であった。周囲にはトラノオシダも生えていたが少なかった。1 株を持ち帰り栽培し、葉 2 枚を標本とした(標本:野崎・松下採取)。写真は、栽培中の個体(2023 年 9 月撮影)と現地の小さな個体(同)。

なお、本種は県内 3 番目の記録になると思われるとされ、同定された大塚孝一氏に感謝します。

(野崎順子・松下茂)

204. ハクウンラン (ラン科)

Kuhlhasseltia nakaiana (F.Maek.) Ormerod

上田市菅平高原において 2023 年 8 月 23 日にハクウンラン属の 3 株を同一場所で採集した(採集者:岩佐富美子)。花数は 3 ~ 5 個、唇弁の舷部の裂片は 4 角形の特徴から、ハクウンランまたはオオハクウンラン *Kuhlhasseltia fissa* (F.Maek.) T.Yukawa と推測された。両者の区分は、「神奈川県植物誌」(2018) および「日本の野生植物 草本」(2011)

の検索表によると、葉の長さと側萼片の長さで、ハクウンランは 3-7mm と 4.5-5mm、オオハクウンランは 9-13mm と 5-6mm とされている。採集された 3 株の葉の長さは、8mm、11mm、14mm であった。また、萼裂片の長さはいずれも約 5mm であった。葉の長さが最も長い 14mm の株を筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所の津田吉晃准教授に葉緑体 DNA の塩基配列を解析して、公開遺伝データベースと照合・検索いただいた結果、「韓国のハクウンランと 2 塩基の変異はあったものの、検索トップヒットはハクウンラン」とされ、採集された 3 株をハクウンランとして標本を保存した(FONU-08922)。

(野口健)

205. ケシロヨメナ (キク科)

Aster leiophyllus Franch. et Sav. var. *intermedius* Soejima

ケシロヨメナは、1993 年に記載されたシロヨメナの変種で、「長野県植物目録 2017 年版」には記録されていない。2023 年 9 月 11 日に、下伊那郡阿智村浪合治部坂峠で写真を撮影し Instagram にイナカギクとして投稿した。その写真を見た写真家のいがりまさし氏から、「ケシロヨメナではないでしょうか」とコメントをいただいた。それまでケシロヨメナとイナカギクの違いをしっかりと認識できていなかったが、10 月に改めて同じ場所で標本を採集し確認した。

原記載(副島 1993) から、シロヨメナは葉の裏面は無毛で毛はわずかにあっても短く 2 倍体が 6 倍体、イナカギクは葉の裏面に毛が多く長軟毛が多い 2 倍体、ケシロヨメナは葉の裏面に毛が多く長軟毛は少ない 4 倍体、という特徴から分けられるとあり、「日本の野菊」に書かれているようにイナカギクの柔らかい手触りと比べるとケシロヨメナはザラツとしている。標本は大塚孝一氏へお送りしたので N A C へ入れられることと思う。「岐阜県植物誌」ではシロヨメナを「茎と葉には少し毛があるがその量は様々」と記載し、ケシロヨメナの記録はない。「グリーンデータブックあいち」にもシロヨメナは記録されているがケシロヨメナの記録はない。比較的最近記載された変種であることから、長野県産シロヨメナの標本の中に、ケシロヨメナに分けられるものがある

るかもしれない。長野県植物誌改訂の際に検討されれば幸いである。

(大塚注：標本；下伊那郡阿智村浪合治部坂高原 alt.1300-1400m, Oct.22,2023, 福岡義洋 no.7510, NAC)

(福岡義洋)

206. コハナヤスリ (ハナヤスリ科)

Ophioglossum × *nipponicum* Miyabe et Kudô

コハナヤスリはコヒロハハナヤスリ *Ophioglossum petiolatum* Hook. とハマハナヤスリ *O. thermale* Kom. の交雑種とされ、ときおり芝の中に群生することが知られており、長野県南部で記録がある。葉は小さく、少し光沢がありやや硬い。

2023年8月、松本市の市街地交差点脇の植え込みの芝の中に、コハナヤスリが多数密生して孢子囊穂を上げていた。当地ではいったん夏に刈られてしまったものの、10月にふたたび孢子囊を伸びるまでに生育していた。外部から芝とともに持ち込まれたものと思われるが、今後とも継続的に発生するか確認したい。

(上野勝典・上野由貴枝)

207. イチョウシダ (チャセンシダ科)

Asplenium ruta-muraria L.

イチョウシダは比較的明るい石灰岩によく見られる小型のシダである。2023年6月に塩尻市の道路脇コンクリート壁に一株で旺盛に生育したイチョウシダが見られた。塩尻市では当地の数km東側の石灰岩地には生育しているので、そこから孢子が飛んできたものと推定される。

(上野勝典・上野由貴枝)

208. ナガバヤブソテツ (オシダ科)

Cyrtomium devexiscapulae (Koidz.) Ching

ナガバヤブソテツは暖地でよく見かけるシダで、長野県では2003年に初めて見つかったから時折県南部で見られるようになった。2023年11月、松本駅近くの田川の歩道脇の側溝に、ナガバヤブソテツがイノモトソウ *Pteris multifida* Poir. とともに数十mにわたって生育しているのが見られた。生育状況は良く、20~30株程度あるものと見られる。今回県中部の松本市で大きな群落が見つかったことから、急速に北上しているものと思われる。

(上野勝典・上野由貴枝)

209. タカオシケチシダ (イワデンダ科)

Athyrium decurrenti-alatum (Hook.) Copel. f. *platyphyllum* (H.Itô) Seriz.

タカオシケチシダはシケチシダ *Athyrium decurrentialatum* (Hook.) Copel. の葉の裏に毛の密生する品種であり、シケチシダよりもやや暖地で見られる。毛の有無以外での形質の違いから両者を区別するのは困難である。長野県では南木曽町と根羽村では大きな群落がある。2023年11月、天龍村の林道を歩いていると、シケチシダが多く見られた。そのほとんどがシケチシダであったが、一株だけタカオシケチシダを見つけた。一株だけで生育しているのを見たのは初めてである。おそらく近くに大きな群落があるものと推定される。

(上野勝典・上野由貴枝)

210. ベニシュスラン (ラン科)

Goodyera biflora (Lindl.) Hook.f.

2023年8月、群馬県在住の一倉行雄氏から長野県白馬村でベニシュスランを見た写真付きの情報をいただいた。場所を教えていただき、1週間後に現地に行ったところ、確かにベニシュスランであった。3株ほどの開花株があり、すでに花は萎れていた。周囲には幼株が5株ほどまとまって生育していた。場所は標高800m程度の人家に近い林道わきのスギ林下で、通常ベニシュスランが観察される環境には思えない。長野県では県南部の天龍村、泰阜村、北部の小谷村の標高の低い場所の一部でのみ生育しているが、いずれの場所も溪流脇の岩場で人家からはかなり離れた場所ばかりである。まとまって生育していることから、種子が運ばれたものと思われるが、すでに付近の適地で繁殖している可能性が考えられる。白馬村では近年暖地性のシダも多く見つかったことから、温暖な地域の植物が進出しているのかもしれない。

[写真(一倉行雄氏)] ベニシュスラン、白馬村 2023年8月

(上野勝典・上野由貴枝)

211. ハクウンラン (ラン科)

Odontochilus nakaianus (F.Maek.) T.Yukawa

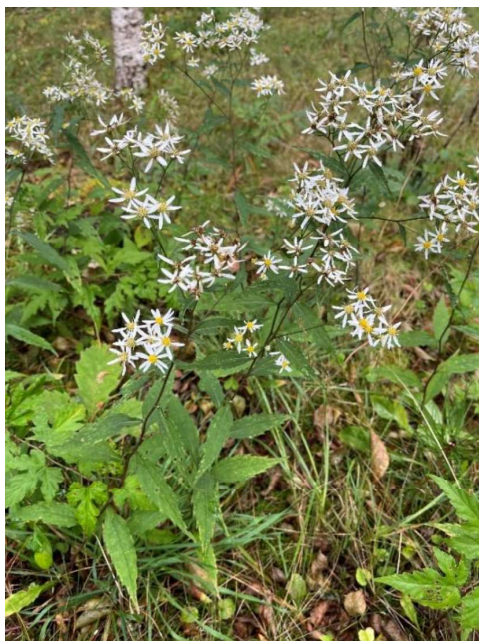
長野県ではオオハクウンラン *Odontochilus fissus* (F.Maek.) T.Yukawa とハクウンラン *O. nakaianus* (F.Maek.) T.Yukawa の両方の記録があり、長野県植物誌(信濃毎日新聞社1997)ではハクウンランは朝鮮半島にあるものとして日本のものはこれと異なる



203 ハゴロモコタニワタリ 植栽



203 ハゴロモコタニワタリ (コタニワタリと混生)



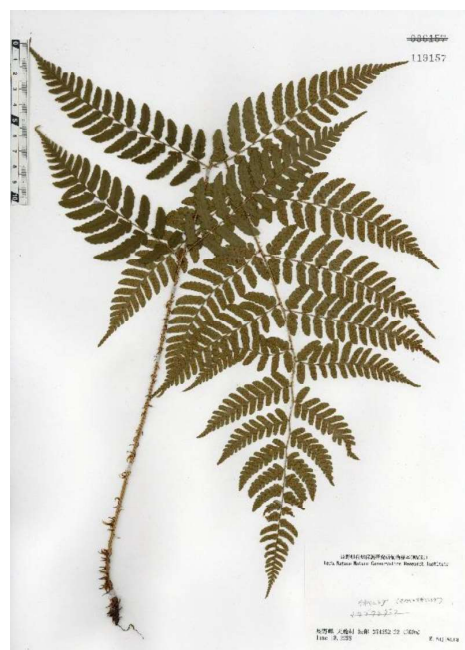
205 ケシロヨメナ



204 ハクウンラン



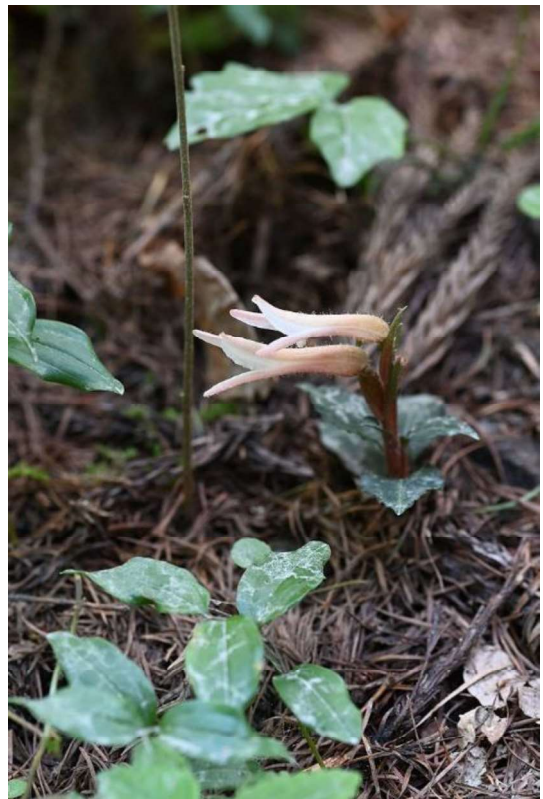
212 オオバノハチジョウシダ



213 ホホベニオオベニシダ



206 コハナヤスリ



210 ベニシュスラン



207 イチョウシダ



208 ナガバヤブソテツ



211 ハクウンラン

るという見解からオオハクウンランとしている記録が多いようである。一方、「日本の野生植物 I」(平凡社 2015)と「日本のランハンドブック」(解説遊川, 文一総合出版 2015)では、両者の違いは花の側萼片の大きさと葉の大きさを検索の識別ポイントとしており、側萼片が 5mm 以上でかつ葉が 9mm 以上をオオハクウンランとしている。また、オオハクウンランは伊豆諸島に分布する日本固有の植物とされており、染色体数も両者で異なっている。

2023 年 8 月に、白馬村のスギ林下を歩いていたとき、ハクウンランと思われるランが開花しているのを見つけた。同日に近くの湿地においても見られた。今回見つけたハクウンランの側萼片と葉のサイズからはオオハクウンランの範疇のほうが近いものの、検索サイズの境界に近く、長さの測定方法によって大きな違いが出るので、ここではハクウンランとした。

(上野勝典・上野由貴枝)

212. オオバノハチジョウシダ (イノモトソウ科)

Pteris excelsa Gaudich.

オオバノハチジョウシダを飯山市北竜湖で採集した (2023.9.6 採集)。生育地は北竜湖畔のスギ林内で、2 個体あった。周囲を探せばもっとあるかもしれない。同所的に、イワガネソウ、イヌイワガネソウ、イワガネゼンマイ S 型と N 型もあり、リョウメンシダが多かった。本種は小谷村大網 (奥原弘人 1975 年採集) と泰阜村 (奥原 1981 年採集) で記録されていたが、近年、天龍村平岡 (上野・上野 2005 年採集)、飯田市南信濃和田 (同 2012 年採集) から知られている。北信地区の千曲川流域ではいままでも知られていなかった。

[標本] 飯山市北竜湖, Sept.6.2023, 大塚孝一 s.n.NAC.213580.

(大塚孝一)

213. ホホベニオオベニシダ (オシダ科)

Dryopteris hondoensis Koidz. f. *rubisora* Sa.Kurata

ホホベニオオベニシダは、オオベニシダの包膜が赤く色づく品種で、まれに存在する。オオベニシダの包膜は赤く色づかない。「長野県植物目録」(2017)に記録されていないので、ここで記録しておきたい。6 月の採品で標本でも包膜が色づいているのがわかる。

[標本] 長野県天龍村坂部 300m, June 18, 1998, 藤原陸夫 NAC.

(大塚孝一)

214. 帰化植物 3 種 (ハツユキソウ、エゾノミツモトソウ、シロバナツタバウンラン)

・ハツユキソウ *Euphorbia marginata* Nieuwl

葉の周縁が白くて美しい。北アメリカ原産。栽培品の逸出植物で、休耕田で分布を広げている。

[標本] 松本市四賀新町 600m, Sept.6.2023, 横内文人, SHIN0205339.

・エゾノミツモトソウ *Potentilla norvegica* L.

ヨーロッパから北アメリカ原産。在来種のミツモトソウは多年草で 3 小葉。本種は一年草で 5 小葉を交える。

[標本] 松本市梓川上立田 680m, May 25, 2021, 横内文人, SHIN0205311.

参考: 水島正美校閲・藤沢正平著「志賀高原の植物」(1958)の植物目録中に本州新産とある。

(大塚注: 志賀高原で見つかった本種は、当初在来種であろうとして水島正美 (1958, JJB33:182.) により報告されたが、浅井康宏 (1964, JJB39:285-289.) により帰化種とされた)

・シロバナツタバウンラン *Cymbalaria mulalis* P.Gaertn., B.May et Scherb.f.alba

ヨーロッパ原産のツタバウンランの白花品。茎も葉も緑白色である。

[標本] 松本市北深志 600m, May 2, 2023, 横内文人, SHIN0205350.

(横内文人)

215. クゲヌマラン (ラン科)

Cephalanthera longifolia (L.) Frisch

早川ほか (2023) の信州大学標本庫 SHIN 等の標本調査により、長野県新産が報告された。本種は、ギンランやササバギンランに似るが、唇弁の距が極めて短いこと、葉が革質であること、葉のしわが少なく葉脈が目立たないことなどで識別できるとされる (早川ほか 2023)。

標本産地として以下が引用されている。

松本市, 奥原弘人 s.n., 10 Jun. 1981 (SHIN140598). 同, 奥原 s.n., 15 May 1975 (SHIN140641). 麻績村, 中村英夫 s.n., 2 Jun. 1985 (SHIN120634). 同, 中村 s.n., 2 Jun. 1985 (SHIN120688). 長野市, 和田清 s.n., 14 May 1981 (SHIN184098). 三郷村 (現安曇野市), T.Terashima s.n., 5 Jun. 1966 (SHIN194097). 上伊那郡, O.Watanabe s.n., 17 May 1992 (SHIN0158018).

(大塚孝一)

216. ヤビツギンラン (ラン科)

Cephalanthera erecta (Thunb.) Blume f. *peloria*
H.Hayak. & Suetsugu

ギンランのペロリア変異体（唇弁が側花弁もしくは背萼片に類似した形態となる型）である品種のヤビツギンランが、早川ら（2023）の信州大学標本庫 SHIN 等の標本調査により長野県、福井県、愛知県の産が報告され、中部地方新産とした。

長野県の標本産地として次の標本が引用されている。

埴科郡，横内 斎 09901, 11 Jun. 1968 (SHIN 89901). 上水内郡，伊藤 静夫 2005, 29 May 1976 (SHIN184086). 下高井郡，横内 斎 07102, 5 Jun. 1931 (SHIN87102). 飯山市，丸山 利雄 s.n., 28 Jun. 1983 (SHIN). Ina-gun, Y. Karayama s.n., 3 Jun. 1959 (SHIN0150729). 南佐久郡，大森 威宏 16090, 23 May 2021 (GMNHJ-BS105500). 木曽郡，藤田 淳一 TCCN21-0418, 8 Jun. 2021 (Hb. Fujita).

(大塚孝一)

217. フガクヤシャビシャク (スグリ科)

Ribes fujisanense S. Sakag. & Mit. Oishi

本種はシャビシャク *Ribes ambiguum* Maxim. に類似するが、①萼片の周縁が紅色を帯びる、②葉柄および葉裏面の脈上に腺毛を生じる、③湾曲した棘を長枝上にもつ、④葉身の切れ込みがより深い、などにより区別されることで富士山を基準産地として新種記載された (Sakaguchi et al. 2022)。本種の分布は静岡県・山梨県の県境域（富士山および静岡県北部）と秩父山地に限られていたが、今回恵那山系の岐阜県側と長野県側で自生が確認された (阪口ほか 2023)。

証拠標本として以下が引用されている。

長野県下伊那郡阿智，17 May 2023 (S. Sakaguchi, T. Watanabe, M. Takami, M. Oishi SS230517B (KYO 00026968). 岐阜県中津川御坂，同 SS230517A (KYO 00026967).

(大塚孝一)

218. ミヤマトキソウ (ラン科)

Pogonia subalpina T. Yukawa & Y. Yamashita

本種は長野県白馬村五竜を基準産地として、Yukawa and Yamashita (2017) により新種記載された。トキソウ *Pogonia japonica* とヤマトキソウ *P. minor* に似るが、唇弁の中裂片上の毛状突起が短く、唇弁の背面が無毛であることなどで区別される。本州の中部地方から東北地方の日本海側の亜高山帯に分布する。本種は以前からその存在が知られていたが、形態学的検討や遺伝子解析により独立種とされた。

タイプ標本：

Nagano Pref., Hakuba-mura, Goryu, alt. 1600m, 10 July 2016, T. Yukawa 16-14 (TNS-holotype).

他に長野県の産地として引用された標本は、北安曇郡白馬村八方岳（小泉秀雄, 1923, TNS）、同八方山（Nobuaki Ookawa, 1954, TNS）などがある。

論文には本研究会会員の坪井勇人氏の基準産地の開花個体の生態写真が使用されている。

(大塚孝一)

引用文献

早川宗志・瀧崎吉伸・藤田淳一・大森威宏（2023）長野県新記録のクゲヌマランおよび中部地方新記録のヤビツギンラン，植物研究雑誌 98(4): 214-217.

大塚孝一（2013）長野県のシダ植物雑記 (10)，長野県植物研究会誌 46: 101-108.

阪口翔太・渡邊敏夫・渡邊道子・高水正夫・大石満（2023）岐阜県・長野県におけるフガクヤシャビシャク（スグリ科）の初記録，植物地理・分類研究 71(2): 195-196.

副島顕子 (1993) 九州におけるシロヨメナ群の形態的、細胞学的研究，植物分類，地理 44(1): 35-51. (英文)

上野勝典・上野由貴枝（2022）長野県産シダ植物の新産地 (12)，長野県植物研究会誌 55: 121-123.

Yukawa, T. and Y. Yamashita (2017) *Pogonia subalpina* (Orchidaceae): a new species from Japan, Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. B, 43(3): 79-86. (国立科学博物館研究報告 B 類 (植物学))